

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 8 月 12 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22500545

研究課題名(和文) 特別支援教育の成果を生かした体育の学習集団形成に関する開発研究

研究課題名(英文) Designing Teaching Method to Facilitate Learning Group Activity in terms of Special Support Education

研究代表者

野崎 武司 (NOZAKI, Takeshi)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：80201698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、特別支援教育の知見を援用しながら、体育の学習集団論を再構築することにある。主な結果：体育において「できる」「わかる」の系統性を教師が持つこと、習熟と認識の発展の節目で「わからせる」ための教材・教具を開発すること等、これまでの体育の学習集団論と授業のUD化との架橋による授業のステップアップ化が必要である。子どもの認知特性等、子ども理解の診断的アプローチが必要である。年間を通じて受容的・肯定的でかつ探究的な学級の風土を醸成することが必要である。若手教員には、多様な授業の考え方や、子どもを深く見取り、学級集団を組織していく教育技術とその習熟プログラムの開発が不可欠である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to revive the Group Study Theory in PE. Main results are as follows: 1) It is required to bridge between the Group Study Theory and Universal Design in Class Lesson. 2) It is required to consider the diagnostic approach on child's cognitive characteristic as a serious factor. 3) It is important to foster the class climate as receptive, affirmative, and inquisitive.

研究分野：体育学

科研費の分科・細目：身体教育学

キーワード：体育の学習集団論 異質協同の学び 特別支援教育 教師の指導性 子どもの主体性 教科の論理 集団づくりの論理 授業のユニバーサルデザイン

1. 研究開始当初の背景

(1) 様々な現代的情况から、体育のグループ学習が成り立ちがなくなっているという危機感が、本研究の動機である。そこには、子どもたちの人と関わる力の弱まり、軽度発達障害の子どもたちの存在、また教師の仕事の標準化（授業者が授業を思いのままにできない）などの問題があるだろう。

(2) 学校現場で初めて立つ若手教員には、様々な苦難が待ち受けている。学級をきりもりできない、授業が成立しないなどの若手教員の困難は、教員養成の改革・改善を求める声ともなっている。

(3) こうした中、特別支援教育が大きな注目を集めている。ADHDなど特別な支援を必要とする子どもたちの問題が顕在化して以降、特別支援教育の知見は、あらゆる教科学習、ひいては部活動の指導、生徒指導・生活指導にまで欠かせないものであると言われる。新しい教育課題に新しい解決方法が様々に試みられているとわかってい。体育科教育においては、主にグループ学習論として、体育と学習集団の問題が論じられてきた。

2. 研究の目的

本稿は、現代的教育課題に真摯に向き合い、特別支援教育の知見を援用しながら、実践レベルで有効性を発揮できる「体育の学習集団論」を再構築しようとするものである。

3. 研究の方法

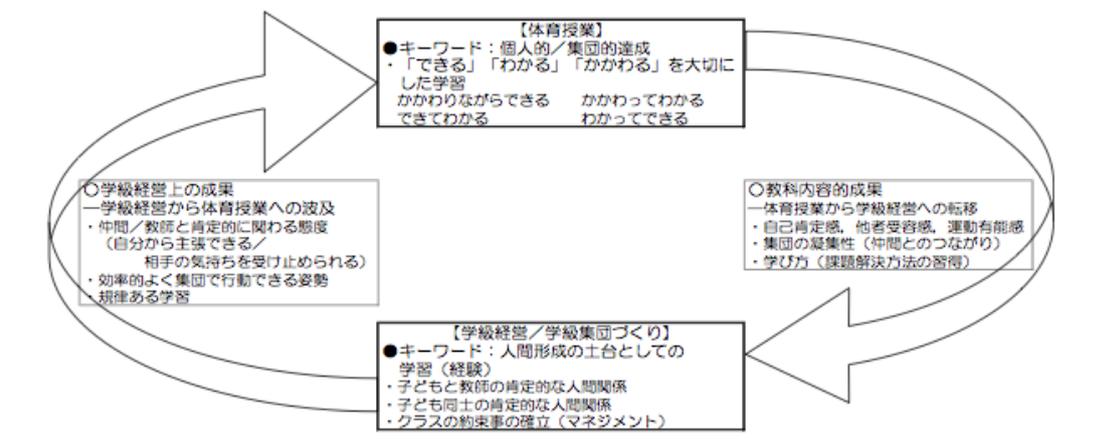
- (1) 実践レベルで成果をあげているベテラン教員の実践に学び、体育授業と学級づくりのためのモデルを構築する。
- (2) それを元に、若手教員のアクションリサーチを試みる。
- (3) そこでの実践と省察から、体育の学習集団形成の開発プログラムを構想していきたい。

4. 研究成果

(1) ベテラン教員の実践事例に学ぶ

5人のベテラン教諭のフィールドワークを通じて、効果的な学級づくりの取組があれば、体育におけるグループ学習も実現可能であることがイメージされてきた。体育は、極めて仲間との関わりが多い教科であり、また協力による達成を体験させやすいともいえる。それゆえ、体育でのいい仲間づくりと、学級づくりは相互に影響を与えあう関係にあることが掴めてきた。細越・松井の実践研究から下記の図式が浮かび上がってきた。

また横田・出口の実践から、学級活動・学校行事を効果的に生かした学級づくりの長期的な取組から、発達障害を抱える子どもをクラスが受け入れ、ともに学び合う活動を実現する姿が浮き彫りになった。宮崎・山路の実践から、特別支援教育の知見とその支援ツールが体育学習に有効であることを検証することができた。(詳述略)



以上から、体育授業と学級づくりのモデル（職能成長ステージ）を作成した。

◎ 体育授業に関わる職能成長ステージ

- ① 「できる」ために教える体育授業
- ② 「わかる」を媒介に「できる」に向かって「かわる」体育授業
- ③ 異質共同での学び合いと探究のある体育授業

◎ 学級経営に関わる職能成長ステージ

- ① 学級経営の基本的条件整備
- ② 創造的・探究的な学級づくりの条件整備

(2) 新入教員のアクションリサーチ

ここでは、採用2年目のA教諭（20代・男性）を例に挙げる。A教諭は、本研究者と学生時代から旧知の仲であり、また本研究者はその置籍校の管理職はじめ多くの知り合いがいた。極めて良好な環境であった。まず、置籍校の初任者担当教諭とA教諭との三者で話し合いを行い、A教諭の課題を浮き彫りにした。意欲的で行動的で子ども好き、チームの輪の中に入って活躍し、目上の指導を謙虚に受け止めることができる、一度指導すると次には改善されている、などの高い評価の反面、子どもへのノート指導などの学習指導、国語・算数の授業に課題があるとのことであった。2年目はその初任者担当教諭の管轄から離れるが、同じ学年団として見守ってもらう体制が組まれていた。

A教諭の1年目の反省、新しいクラスの子どもたちの情報（初めて担当する5年生）を元に学級経営計画を立てた。「高学年として責任をもって行動できるようにする」をテーマに、学級目標を「心を一つに協力して

のある 明るいクラスにしよう」と定めた。指導上の工夫として、行事を柱とした学級づくり（行事ごとに学級目標と個人目標を立て、事後に振り返る）、小さな成功を賞賛し積み重ねる、などなど取り上げた。この学年はここ数年で問題の多い学年であった。学力差も大きく、基本的な生活習慣の乱れている子、明らかに学習障害の疑われる子などが存在していた。A教諭によれば、学年の中のしんどい子どもたち（ブラック）は、両隣のベテランの先生が引き受け、A教諭のクラスにはグレイの子どもたちが集まっているとのことであった。

またA教諭は、2年目にして体育主任の分掌を与えられていた。4月から1学期に開催される運動会の準備に翻弄することとなった。初任の最初

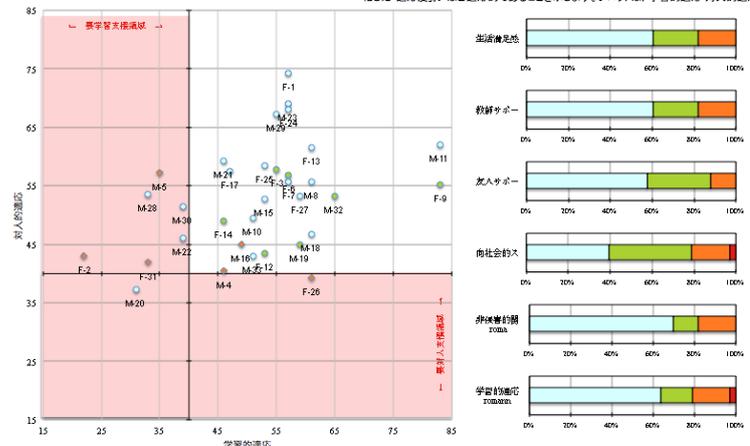


図1：4月末の学級の状況

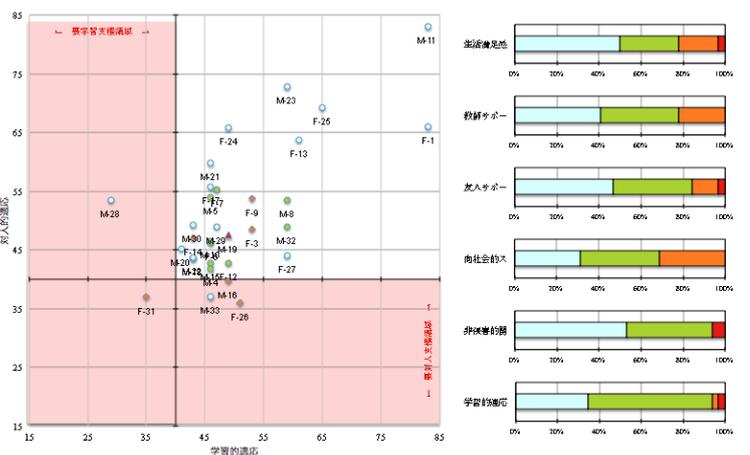


図2：1学期末のクラスの状況

責任感

の頃の半分も授業準備できないまま毎日の授業をこなす日々となった。

詳述はできないが、ASSESS (Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres)を活用した学級の子どもたちの分析を併用した。

1学期末には、特に对人的適応の局面において、クラスの雰囲気は改善されている。年度当初に、厳しいしつけを心がけ、厳格な学級開きを行ったことも影響して、4月末では「担任のことが信頼できるか」「担任は困ったとき助けてくれるか」

「担任は自分のことを分かってくれるか」といった項目の得点が特に低かった。初めての高学年、しかも前年度までの苦労話などから、A教諭自身、自分らしくない子どもとの関わり方であったという。そこから、賞賛行動を増やす、つまづきそうなポイントをみつけて事前に手を打つ、誰でも分かる言葉で具体的な指示を出すといった、前年度の低学年で身に付けた関わり方(自分らしい関わり方)に少しずつ移行させた。体育主任としてあまり自分のクラスの運動会指導に力を入れることができなかったが、丁寧な学級指導の成果もあって、運動会のクラスマッチ部門で優勝を飾る。クラスのがんばり、個々人のがんばりを振り返り、全員で共有する中で、学級の求心力は大きく高まった。一方、学習困難児を中心としたクラスの学習的適応に関して、大きな改善は見られなかった。端々に分かりやすい指示、ビジュアル教材の活用に善処を重ねた。暑さの中にだらける時間が増えたり、あわせて教師の叱責の声が高まったりと、どんよりとした時期を経て、宿泊学習のスタンツへの取組や1学期最後の「お楽しみ会」への準備では、子どもたちの主体的な取組が見受けられた。A教諭も子どもたちの話し合いに任す姿が目立つようになった。

以上、1学期をのりきったA教諭であったが、この後、継続的な研究としての関わりは難しくなった。(詳述はできない)

(3) 体育の学習集団形成の開発プログラムの構想

戦後の学校体育をリードしてきた高田典衛は、かつて「体育こそが主要教科である」と言った。体育は、からだづくり、仲間づくり、認識学習と総合的な教科であり、子どもの多面的な成長に欠かせないものであるとした。筆者たちのみならず、学校体育の研究者であるならば、体育の重要性に批判の余地はない。われわれは特に、子どもが学び合って育つことを重視し、現在において、かつての異質共同の学びを実現する方途を目指したのであった。

子どもを取り巻く環境の様々な変化から、体育に関わる身体能力の格差が大きくなっていく一方である。加えて、軽度発達障害など、学級における学び合いが困難になってきている。また学習指導要領の改訂により、どの教科も学習内容が増え、一つの単元に割く時間を小さくせざるを得ない状況がある。以上のような現代的課題の中で、今回の研究期間において、体育における探究的な学習を基盤とした「異質共同の学び」を実現することはできなかった。しかし、「わかる」を媒介に「できる」へ向かって「かかわる」授業》を実現する可能性を提示することはできたと考える。

そこに欠かせないのは、下記の点である。

- ◎ 学習内容の体系的な整理に基づく、教師の指導方略の策定(子どもに何を教え、何を考えさせ、何を話し合わせるか、等) 体育において「できる」「わかる」の系統的発展のストーリーを教師が明確に持つこと、習熟と認識の発展の節目で「わからせる」ための教材・教具を開発すること、つまづきの過程を取り出し、子どもたちを立ち向かわせるように工夫することといった、これまでの「体育の学習集団論」と「授業のユニバーサルデザイン」との架橋により、<授業のステップアップ化>が必要であることが分かった。学級集団の成熟に合わせ、「子どもを動かす活動」「子ど

もに考えさせる活動」など初歩的な取組から、「ペアで考える活動」「ペアで解決を図る活動」など順次ステップアップを図り、学級集団の成熟を促しながら、授業を高度化する必要がある。

- ◎ 1年間の学級づくりの指導方略の策定（課題のある子を生かす学級づくりを、年間スケジュールの中で、学校行事などとも関係させながら取り組むこと）受容的・肯定的でかつ探究的な学級の風土を醸成することが必要であることが分かった。学級経営の年間構想とともに、体育の学習集団論を生かしていく取組が不可欠である。
- ◎ 特別支援教育の知見を生かした「子ども理解」と「支援」の活用（学習指導においても、学級づくりにおいても）子どもの認知特性や生活履歴など、多様な子ども理解の診断的アプローチが必要であることが分かった。また学級集団の状況分析を様々に試みる必要があるが、捉えた学級の状況から、如何なる取組を構想するかに関しては、特別支援と集団形成に関わる教師の専門性が問われる。

本研究においては、若手教員に上記の方略モデルを試行してもらい、その成果を検証することが一つ大きな課題であった。しかし、この研究課題に関しては、成功することができなかった。

新人教員は、1週間の学校の流れ、1ヶ月の学校の流れ、1学期の学校の流れ、1年の学校の流れを理解できていない。そうした中、年間を通した学級の成長など、リアルな実感として掴めず、日々の実践で何を取り組めばいいのか、実践レベルで彼らに指針を与えることができなかった。また多様な子どもたちに相応しい体育教材のレパートリーや、学級活動のレパートリーに乏しく、比較対象がないため、自らの取組の出来不出来素すら掴めない現状があった。さらに、通常の子ど

もたちでさえ、何を提示すればどのように反応するのか、明確なイメージを持たず、授業においても、学級づくりにおいても、常に手探りであった。特別な支援の必要な子どもへの対応の配慮にまで手が回らないのが実情であった。

以上から、若手教員への最も有効な手だては、「若手教員のための教育技術とその習熟プログラムの開発」であると痛感させられた。彼らでも活用しやすい体育授業のモデル（「できる」へ向けて教える授業、「わかる」を媒介に「できる」へ向かって「かかわる」授業）を示してやることだと深く実感された。若手教員にとって、子どもの実情にあった体育の教材開発にその都度取り組む時間的な余裕はない。ある種のパッケージのレパートリーの重要性を痛感させられた。

特別な支援を必要とする子どもたちへの支援は、個別具体的なものとなる。その実践力の獲得には、数々の経験の積み重ねが欠かせない。ベテラン教師たちは、苦しい体験を乗り越えて、新しい教育実践の境地を生み出してきたのである。それを、考え方を示す程度で、新人教師が乗り越えられるはずはない。ある種の技術を道具として身に付ければ、簡単に乗り越えられるといったものではない。

しかし、あるひとまとまりの授業モデルは、ベテラン教師の身構えや、子どもへの目配りの仕方、展開の仕方などを含み持っている。新人教員は、現代的教育課題に対応しうる授業モデルを反芻することで、比較的短期間に実践的指導力を上げていくのではないかと感じられた。

われわれ研究者の側は、若手教員の力量形成の糧となる習熟プログラム（手軽なものから高度なものへ）を開発していくことが肝心ではないかと反省している。今後の研究に託したい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

①野崎武司(2011)「体育における学習集団形成に関する開発研究(1)」『香川大学教育実践総合研究』Vol. 22 pp. 159-167

②野崎武司(2014)「体育における学習集団形成に関する開発研究(2)」『香川大学教育実践総合研究』Vol. 28 pp. 59-66

[学会発表] (計3件)

① 野崎武司「発達障害の子どもを抱えるクラスの学級づくりと体育授業」平成23年度体育授業研究会(愛媛大学)

② 野崎武司「体育教師の職能形成支援に関する基礎的研究」平成24年度四国体育・スポーツ学会(高知大学)

③ 野崎武司「体育教師の職能形成支援に関する基礎的研究(その2)」平成25年度四国体育・スポーツ学会(高知大学)

[図書] なし

[産業財産権] なし

[その他] なし

6. 研究組織

研究代表者

野崎 武司 (NOZAKI Takeshi)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：80201698

研究分担者

飯村 敦子 (IIMURA Atsuko)

鎌倉女子大学・教授

研究者番号：70326982

細越 淳二 (HOSOGOE Junji)

国土舘大学・文学部・教授

研究者番号：70326982

米村 耕平 (YONEMURA Kohei)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：20403769